

第6回 決算書アナリスト試験出題の趣旨

問題の構成：

問題の構成は、毎回、選択問題、収益性の問題、安全性の問題、投資にかんする問題と分析に関わる総ての分野に亘っている。また、収益性、安全性の問題においては、いずれかの一方は、実際の財務諸表を利用した問題（今回は、第3問）にしている。なお、分野の出題の順序については、例えば、今回、第3問のように、受験者が解きやすいように見開きにした結果、順不同になっている。

第1問 選択問題であり、第2問以降の問題で触れなかった事項を問い、分析の総ての範囲の知識を問うことをねらっている。関係する各問のテキスト（第3版）の該当ページを示しておく。

1. → p. 28、38。 2. → p. 18（なお、巷間、しばしば資本金が大きいから大きい会社であるという話を聞くことがあるが、これが正しくないことを認識して欲しい。） 3. → p. 14、45。 4. → p. 7、54。
5. → p. 12、49。 6. → p. 6、39。 7. → p. 60、61。
8. → p. 42。 9. → p. 21。 10. → p. 18。

第2問 株式投資の問題である（第6章）。株式投資においては、有価証券報告書の情報に接することが必要である。そこで、実際の有価証券報告書の情報を一部、抜粋し、実際資料により出題している。なお、前回は実際資料により出題している。

投資においては、利回りが基準となる。よって、配当利回りを問うている。更に、この配当の根拠つまり企業利益の裏付けがあるかどうかを確認しなければならない。これが配当性向である。以上は、配当に関する分析である。

更に、投資においては、株価それ自体の評価も必要である。この評価においては、会計情報との関係が問われる。それが、株価収益率と株価純資産倍率である。前者は、利益との関係、後者は、会計上の価値すなわち純資産との会計である。

このようにこの問題は株式投資の基本的な問題を扱っている。

第3問 安全性を問う問題である（第5章）。ここでは、同時に本試験の意図でもある実際の財務諸表（今回は貸借対照表）に触れさせている。

安全性の判断は、短期と長期の視点で行われるが、この基本的指標、流動比率、当座比率、総資産負債比率を問うている。これを踏まえた上で、更に分析を進めなければならないが、その意識を陶冶させる意図で、売上債権対仕入債務比率、固定長期適合率も問うている。

ここでは、分析に際しての考え方として、趨勢を見る視点が必要であり、設問の文章

はこの形を取っている。

以上の分析では、ストックの指標を用いたが、フローで見る姿勢も安全性が必要であり、最後に、フローの視点として、キャッシュ・フローに関わる問題も問うている。

なお、銀行家比率は、アメリカの伝統で200%、当座比率は、計算的に負債と対応し、100%が好ましいとされている。しかし、銀行家比率について、銀行との結びつきが強い（間接金融の）我が国の実務では、120%以上なら良いという調査報告もあるので、合否判定にあたって、これも考慮した。

第4問 収益性（第4章）を問う問題である。収益性では、企業目標としてのROEが問題になる。そこで、先ず、この指標の計算を求めている。この企業の場合、ROEの低下が問題となっている。そこで、その原因を探らなければならない。ここでは、従業員のリストラが問題となっているので、営業上の収益性指標たる、売上高売上原価率と売上高営業利益率を計算させ、低下の原因が、人件費が計上されている販売費及び一般管理費にあることを確認させている。

ところで、この企業は目下、リストラの方針を出したばかりであり、当面の人件費の支払い資金は確保しなければならない。そこで、この手段を損益計算書と貸借対照表から見て取る能力も問うている。つまり、企業の行動を財務諸表から読み取る能力を問うている。

この問題は、財務諸表の数値を丸めているものの、実際の某企業の例を使用している。コロナ禍の企業の行動を分析でき、実践を知る好材料になる筈である。

なお、今回の出題の順序は、株式投資の問題が企業活動を問う問題に先行している。これは受験生が問題を解くときに、ページを送らなくて良いようにするためである。つまり、見やすさを考えている。例えば、第3問を先行させると、解答にあたり、ページをめくらなければならない、受験生の解答作業が面倒になる。